

## 『笑符』考（二）

佐藤 雅仁（三遊亭 貴楽）

### はじめに

馮夢龍の編纂した中国の笑話集『笑符』を見ると、現在の落語の元となったものではないかと思われる笑話が多く見られる。この『笑符』が日本に渡った年代どころか、持ち込まれたとする証拠すら無い。しかしながら、その類似の数の多さなどから考えると『笑符』が落語の元本になったと考えて差し支えないと考えられる。今回は『笑符』の中の各笑話を掘り下げてみたい。

本論は上段に『笑符』の原文、下段にその訳を記することとする。

尚、（一）の漢数字は平凡社・松枝茂夫編訳「中国古典文学大系・歴代笑話選」を参考に『笑符』を七百八話に分けたものを流用させていただいた。

又、今回の『笑符』考（二）は以前発表した『笑符』考（一）（学術典籍研究・第三輯・椋伽林学報・二〇〇〇年三月発行）及び、『笑符』典拠考（二）（学術典籍研究・第四輯・椋伽林学報・二〇〇一年三月発行）の続きとし、よって本論では『笑符』巻一古艶部第十八番を初めとする。

## 『笑符』

(一八)

余又聞一酒令

除眞盜外、要似盜者

一人曰、錢偽首開天窓

一人曰、

三槽飛船載歹人又一人曰

四人轎兒喝道來、

衆譁曰、此何以似盜

答曰、你看如今擡任轎上的

那箇不勝似強盜

余は又、こんな飲食中の遊びを聞いた。「泥棒では無いのに泥棒に似たものは。」との題に一人は、「金を取り立てるのに自分が頭と偽って中間搾取する。」と言ひ、一人は「三槽の早船に悪人を載せる。」と言つた。そして一人は「四人がきの籠で先払いをしながら来る。」と言つたので、「何故それが泥棒に似ているのですか。」と聞くと、「現状を見なさい。今時、早駕籠に乗っている者は強盜に似ている者ばかりだ。」と言つた。

籠に載っているのは前文「(十七) 官符生日」との繋がりから考えて役人であろう。役人の腐敗を訴える笑話であるが、これは、その役人達と癒着していた商人達などへの皮肉でもあろう。上司に言われた取り立てを多めに取り、その分を中間搾取する。いざ悪行が発覚すると庶民の手の届かない所に逃げる。そして生活は派手で、いつも我物顔で道を歩くところなど現代と変わらないのではないだろうか。古来より人間の本性が変わっていない事を示す笑話である。

(十九) 応夢

一官性貧、見臭隸鬢挿一錢、

欲取無計、

乃詐為夢語曰、

一箇錢也是好的既醒、

召隸至近、問曰、

適我夢中有何言、

隸以実封、

官乃取其鬢邊乃錢、

叩齒曰、応夢大吉

昔、中国では真劍に神仏に祈る時、齒をカチカチ叩く習慣があつた。夢の中の神仏のせいにしてでも金が欲しかつたのである。文頭に貧乏な役人と書いてあるところから、同じ役人の中でも上司に賄賂を差し出してばかりで、自分の懐には何も残らず、日の目を見ない無能な役人であろう。そんな者であるから庶民から搾取することしか考えていなかったことが想像できる。逆に考えると、そんな役人の召使いが役人の見えるところでは身を付けているという馬鹿さ加減が垣間見える。その召使いこそが当時の庶民の程度であつたのだろう。貪欲な役人とそれに搾取されてしまう隙を作っている庶民に対しての皮肉も込められたものだと思われる。

(二十) 土地

一官貧甚、任滿歸家、

ある貧乏な役人、任期満了で家に帰ってみると、家の

見家属中多一老叟、

問何人、答曰、

某県土地也、

問何為來比、

答曰、

地皮都被括將來了、

教我如何不隨來

中に見知らぬ老人が一人多く居る。「あなたは」と聞くと、「ある県の氏神だ」と答える。「何の為にここに居るのですか？」

と聞けば、答えて、「お前さんが前の私の土地全てのものを搾取してしまったので、私も今来たところだ。何故私が連れ立って来なかったか教えてやろうか」

「括地皮」には官吏が人民から搾取するとの意味がある。

松枝氏は最後の一文を「地の皮をお前さんに剥ぎ取られてしまうたから、わしも一緒に付いてこないわけにはいかなかったんじゃ。」と訳しておられるが、「不隨來」とあるところから、神でさえもこの役人よりも一刻も早く次の土地に來なければ、全てが役人によつて搾取され、無くなつてしまうと考へていたとした方が自然であると思われる。やはり前文「(十九) 応募」と同じで役人の貪欲さが読み取れるが、ここでは文頭に「一官貧甚」とあり、「甚だ貧乏」と強調してあるところから、前任地で散々搾取したにも関わらず、今は何も無い状態にあるのだから、「悪銭身につかず」の意味とも取れる笑話である。

(二十一) 青盲

一青盲人訴訟、

自訴眼瞎官曰、

一隻清白眼、

ある見た目は普通のめくら、裁判の席で「私はめくらです。」と言うと、裁判官は「ちゃんと見る眼を持っているではないか。何故そのような偽りをもうすのか」

如何搾睛答曰、  
老爺看小人是清白的  
小人看爺是糊塗的

と言ったので、答えて、「裁判官、貴方は私を清白だと仰るのですか。私は貴方を愚人と見ます」と言った。

青盲人とは普通の眼をしていながら視力の無い人という。その男が正直に「眼が見えぬ。」といっているのに、「清白」と外見だけで「普通の眼をしているのだから眼は見えるだろう。」と言う。「清白」は「潔白」との意味があり、「清白」と「潔白」とを掛けた笑話である。外側でしか判断が下せない、内面、ものの本質を見ることが出来ない当時の役人達の無能さを笑ったものであろう。

\*ここでの「老爺」は旧時官紳に対する敬称。

\*「小人」は謙遜の自称。

## (二十二) 避暑

官値暑月、欲求避暑之地、  
同僚紛議、或曰、  
某山優雅、或曰、  
某寺清間、  
一老人進曰、  
總不如此公廳上最涼也、  
官問何故、答曰、  
比地有天無日頭

ある役人、あまり暑いので何処か避暑地がないか探していたところ、同僚達が色々考えて、ある者は「あの山は優雅だ」と言い、ある者は「あの寺は閑静で良い」と言ったが、ある老人が進み出て「全く持つてこの官舎が一番涼しいですよ」と言った。役人は「何故だ？」と聞くと「ここは頭の上にお天道様がありませんから。」と答えた。

役人の天に顔向けできない行為を皮肉ったものか、はたまた、「同僚」とあるところから、役人達が影で物事を自分達の都合の良いように決めてしまうことに対する批判であろうか。老人が進み出て言うところから、「昔はそんな役人はいなかった。」との思いがあるのか、それとも「いつまでたっても変わらぬものよ。」との諦めがあるのか、どれにしても役人に対しての批判である。

\* 暑月は陰暦六月の別名のこと。

(二十三)

有貴人干雪候居氈帷中、

熾爐飲酒、你々力薫灼、

乃云天氣不正、

一椽居帷外、

稟曰、小人站處天氣頗正

貴人が雪の降る日に、毛氈幕の中で酒を飲んでいたところ、これに逆上せて盛んに汗をかいたので、「天氣が違う。正しくない」と言った所幕の外で一軒家に住む者が、「私の住まいは大変天氣が正しゅう御座います」と申し上げた。

松枝氏は訳中で、「幕の外にいた下役が貴人に対して申し上げた。」としていらつしやるが、「一椽」には「一軒家」との意があり、私はこのように訳した。ただ原文には「站處」の言葉も見受けられる。「站」は「立つ」の意があり、「處」には「居る」の意があるので、どちらにも訳せると思う。

この「天氣不正」を笑話とした場合、松枝氏の方が良いと思われるが、下役とはいえ、自分の保身しか考えていない役人が果たしてこのような言葉を発するだろうか。それよりも何の欲も無く、自然に生きている庶民が発した方が当たり前のように感じられる。そうなれば、何でも自分の思った通りになると考えていて、自分が一番正しいと思ひこんでいる貴人の我儘ぶりを浮き上がらせることにならないだろうか。

(二十四) 封君

有市井獲封者、

初謁県官、

跼蹐甚、堅辞上座、

県官曰、叨為令郎同年、

理還該侍立、

乃張目問曰、

你也是屬狗的麼

「封君」とは、昔、子孫が出世した為、その父祖が封典を受けた時これを言い、「封」とは領地を授けて爵位を与えることをいう。又、「同年」とは年齢が同じの意味ではなく、同じ年に試験を及第した者同士、つまり同期を「同年」という。「同年」は互いに尊敬し合い、親しく付き合つた者が多く、相手の父も自分の父と同じと考えて接した。

これは、「礼教」の教えからきたものと考えられるが、この話はそれを知らない父親が、自分と県知事は同い年だと勘違いしたものを書いたものであるが、決してこの役人（県知事）を嘲笑したものではない。むしろ、「同年」を知らなかった父を笑つたものである。いままでの笑話から考えると、大変珍しい笑話である。『馮夢龍』はこの「同年」こそが役人腐敗の元凶と考えていたのではないだろうか。同期の者達が結託すれば、いくらでも悪行は行える。人間とは弱い者である。いつのまにか大きな渦に巻き込まれ、気づかぬ内にその中で染まってしまうものである。今は普通の人間であるようなこの県知事の将来その渦に巻き込まれる可能性が有ることを考えさせられる笑話ではないだろうか。それこそが『笑符』の編者の心情、つまり礼教に対する批判で

領地を授けられ、爵位を与えられた町民の父が初めて県知事にお目に掛かつた時、甚だ身を小さくして上座に着くことを固持したため、県知事が「何故、そんなに恐縮するのですか。私は貴方の令息と同年なので、私が見張り言つた。「貴方も戊午年のですか？」

はないであろうか。

\* 「市井」とは町民・庶民の意。

(二十五)

又一人興県官同坐

方揮扇、適茶至、

歳扇不送、遽挿之衣領内、

県官大笑

又、同じ様な男が県知事と同席して、扇で仰いでいたところ、丁度お茶が運ばれてきたので、扇を隠そうとしたが間に合わず、慌てて襟の中に差し込んだのを県知事は見て大笑いした。

この笑話は「(二十四) 封君」とはまったく逆の笑話である。「同年」のことは知っていた男は県知事といかにも親しそうに、偉そうに付き合っていたのだろうが、第三者がお茶を持ってきてそれを見られまいと動揺し、扇で仰いでいる無礼を見つかるのを恐れて扇を襟の中に隠したのである。普段の品の無さが思わず出て県知事が笑つたものであろう。庶民の教養の低さを笑つたものであるが、『馮夢龍』は庶民が悪習を改善することも無く、現状に納得して生きている事に対してジレンマを感じていたのではないかと感じられるものではないだろうか。

(二十六) 公子

一人問封君興公子孰樂、

答曰、做封君齒已衰矣、

惟公子最樂、

ある男が「封君と公子、どちらが楽だろうか」と問うと、「悲しいかな封君は歳を取ってしまえば終わってしまうから、公子の方が楽では」と答えたところ、そ



其人急趨而去、

追問其故、

の男は急に走り出した。追いかけて訳を聞くと、「父を学校に入学させようと思います」と答えた。

日欲送家父上学

公子になるには自分で試験を受けなければならない。この男はそんな実力もないし気力もない。封君は公子になつた親に与えられるもので、子に与えられるものではない。この男はそれを知らずに親が公子になれば自分が封君になれると思つていたところ、封君も歳を取つてからでは何にもならないことを聞いて、自分では嫌なので父親に勉強させて公子にして、自分は早い内に封君になろうと思つたのであろう。やはりここでも庶民の卑しさや礼教を重んじ、「考」が一番と教えられながらも、所詮は自分の欲の事しか考えられない者達への批判を書いたものであろう。

(二十七)

有公子兼封君者、

公子でありながら封君の者がいた。その父が非常に羨

父対之欣羨木已、

ましがるので、不思議に思つて聞いてみると、「お前

訝問其故、曰、的爺既勝似我的爺、

の父は私の父より幸せであるし、お前の子は私の子よ

你的兒又勝似我的兒

り幸せである」と答えた。

ここでの父とは一族の長上、長男のこと。

つまり公子と封君と兼ねている男と、羨んでいる男とは兄弟であらう。とすれば、「お前の子は私の子より幸せだ。」というのは理解できるが、爺(父)はどうなのか?この長男は今まで何も努力せず人をただ羨ましく思つ

て身勝手に父を父とも思わず生きてきたのであろう。このような人々がこの時代には多かつた事を物語る。又、「礼教」の教えに対して、「考」の中にその個人の力量を推し量つての尊重ではなく、ただ単に尊重しろとの崇拜思想を批判したものではないだろうか。

(二十八) 県丞

一丞不識字、

凡買物即書形簿上、

令来、值丞不在、

展簿規之、怪其所為、

每行用朱筆直抹、

丞歸視、怒曰、

你衙内買紅燭如何也記在我簿上

役人の無知、無能を笑つたものであるが、それ以上にこのような人間が副知事にまでなれる世の中を嘆いてい

(二十九) 典史

衙官相遇、各問何職、一人曰、

随常茶飯拾将来蓋義取見県成丞也

一人曰、熱湯鍋裏下文書、

ある副知事、字を知らない為に、買い物をする時と直ぐにその形を帳簿に書いていた。知事が来た時、副知事が居なかつたので、知事が帳簿を見て不思議な行いだと思つて、帳簿の毎行を朱色の墨で塗りつぶした。副知事が帰つてきてそれを見て怒つて言つた。「役所で買った紅蠟燭を、何故私の帳簿に書き込むのですか。」

役人同士が会い、職種を尋ねると、一人が「普段は茶や飯を摘み、選んで持つてくる」。「見成」つまり「県丞」と言つた一人は「鍋の中の熱湯に文書を入れて蓋をす

蓋煮主簿也、

一人曰、

郷下租蠻子糞抗問者不解、

答曰典尿史

若如比說環是典史近錢

る」と言った。「煮簿」つまり「主簿」（書記長）と答えた。もう一人は、「田舎者の南方人、肥溜めにも租税する」と言ったので、何のことが解らず、聞けば「典尿」つまり「典史」（記録係）です」と言う。順番から言えばやはり典史が一番金に近い。

「見成」とは「誰にでも出来る当たり前のこと」の意で発音は chien + cheng、「県丞」は発音が hsten + cheng と似ている。言葉の遊びと共に、「県丞」は誰にでも出来る役職であると言っているようだ。「煮簿」と「主簿」はどちらも発音が chu + pu くて同じもの。文書を煮る、つまり面倒な書類や都合の悪い書類は自分で読むこともなく、人が読めないようにして蓋をしてしまうことであろう。「蠻子」は北方人が南方人を罵る言葉であり、「典尿」も「典史」も発音は tien + shu で同じものである。日本にもある駄洒落に似たものとして笑話にしてある。

「県丞」も「書記長」も仕事をしなくてもその地位に居られること、役人の無能振りを嘆いているようであるが、その中には「記録係」のように、誰にでも、何にでも租税を掛けて自分の懐に金を入れてくれる者が伺える。

(三十) 新替職

新替職揮使興父別居、

歳首往賀、

父未起、

因留卷生帖、

新しく職場替えがあつて、その職場の指揮官に任命された。父と別居していたこの男が父の所に年始に行くとき、父親がまだ起きていなかったので巻生帖を置いていき、それに「沢山話したい事が有ったのですが、急

曰多致意、急往符県、  
不得面拜矣、父怒甚、

召而責之曰、

汝如何用卷生帖拜我

子回首沈吟曰難道我襲職之後、

就不該認他作親卷了

或者不是他令尊莫恠他

いで府県に戻らなければいけないのでお会いできません」と書いていった。父はそれを見て非常に怒り、直ぐに呼び寄せて「私に会いに来たのに、何故卷生帖を使ったのだ」と責めると子は頭を振り、考え込んで、「はて、私がこの役職を受けたからには、誰も親族とは認めていけないはずだが」と呟た。おそらくこの父でなければ咎めなかつたかもしれない。

卷生帖とは婚姻関係にある二家の間で尊長者が向こうの家の卑幼者に対して自ら称して出す名刺（中国古典文学大系・平凡社・歴代笑話選・松枝茂夫編訳）とあり、この子は社会的地位を親子関係よりも上と見、物の本質を理解していないものと思われる。つまり、社会とは人間が作っているものであり、その中には形式上の物事もあることを理解していかないのだろう。

その時代の中国社会の体制への批判であり、人を問う笑話である。笑話であるものの、相手が自分の実子であるために寂しい笑話である。

（三十一） 堵子

一武官出征将負、

惣有神兵助陣、反大勝、

官叩頭請神姓名、

ある武官が出征し、まさに敗北しようとしている時、俄に神兵が現れて助太刀をして、勝利を収めた。武官が地に頭をつけ神の名を問うと、「私は弓の的の神だ」

神曰、我是堵子官曰

少将何徳、

敢劳堵子尊神見救、答曰、

感汝乎昔在教場從不曾一矢傷我

如今武官不肯習射

豈死靠堵子報恩那

(三十二) 夜巡

一武弁夜巡、

夜有犯夜者、

自稱書生会課歸遲、

武弁曰、既是書生、

且考一考、生請題、

武弁思之、不得、喝曰、

你造化了、今夜幸而没有題目

(三十三)

遼東一部職素不識字、

被論、使人念劾本云

當革任回衛者也、

と言うので、「私に何の徳があつて、この様な功績を  
与えて下さつたのですか」と問うと、答えて「お前は  
昔から今まで一度も練習場で一矢も私の体に傷をつけ  
なかつた」と言つた。今の武官は進んで弓の練習など  
しない。ひよつとしあくまでの神の恩恵に肖らうと  
しているのではないか。

一武人が夜回りをしている時、夜歩きの禁制を犯した  
者がいたので捕まえると、「私は学生です。学校の試  
験で遅くなつたのです。」と言うので、武官が「これ  
学生、では一つ問題を出してやろう」と言い、武官考  
えたが問題が思いつかなかつたので、大声で怒鳴りな  
がら、「本当にお前は幸せな奴だ。今夜は問題が無かつ  
たぞ」

遼東(満州・中国北東部)のある武官、字をみたこと  
も無い男であつたが、糾弾されたので人を使つて糾弾  
文を読んでもらつた所、「当然、現職を解いて、遠隔

痛哭曰、

革任回衛、也是小事、

這者也、兩箇字、

怎麼當得起

有聞此話而笑者、

余謂之曰、

莫笑莫笑、

近來天下事都在者也之乎輩操縱中

此武職痛哭何減賈太傳

地の国境警備に回すべきである」と書いてあるのを聞

き、酷く泣きながら「職を解かれ国境警備に回される

のは大したことでは無いが、この『者也』の二文字は

どうしてなのか。「耐え難い」と言った。この話を聞いて

笑う者がいたので私はその者に言った。

笑うな、笑うな。今の天下のことは皆『者也之乎』の

輩によつて操られている。武官の痛哭は『賈太傳』に

劣るものではない。

(三十一) 堵子・(三十二) 夜巡・(三十三) は文を重んじる中国らしい笑話である。武人を下に見るのは日本と同じである。(三十一) 堵子では武人でありながら武道を進んで鍛錬しない者達を笑い、(三十二) 夜巡では武人の無知を笑う。馮夢龍もこの武人達の無知、無能を嘆いたのであろう。しかし、(三十三) ではこの武人達と変わらない者達が政治を司っているのだから、役人も大して違わないことを嘆いているように思われる。最後に『賈太傳』を登場させているが、この部分こそ馮夢龍が声を大にして言いたかった事ではないだろうか。

\* 賈太傳 II 賈誼 漢代の文章家。当時の政治を論じた上疏文の中に天下に痛哭すべきものをいくつか列挙している。(中国古典文学大系・歴代笑話選・松枝茂夫編訳)

(三十四) 太監

鎮守太監觀風、

出後生可畏焉為題、衆俱笑、

璫問其故、教官稟曰、

諸生以題目太難、

求減得一字也好、

璫笑曰、既如此、

減後字只做生可畏焉罷

或疑太監何以附古艷、

曰、從來富貴的、

有得幾箇不俯仰內相

\*科挙の試験では、四書の中から一句を出して問題とし、それで八股文を作らせる。『論語』子罕篇の文は「後生可畏、焉知來者之不如今也」（後生畏るべし、焉ぞ（いづくんぞ）來者の今に如かざるを知らんや。）である。字官が一字減らしてくれというのは、「焉」の字を除くようにと言ったのだが、通じなかったのである。「後」の字を除いたのでは益々意味をなさない。（中国古典文学大系・歴代笑話選・松枝茂夫編訳）  
やはり役人の無学を笑ったものである。知らないものを知らないと言えない悲しさ、間違いを気づかない愚かさを嘆いているのではないだろうか。

以上「笑俯」卷一、古艷部十八話から三十四話である。

武人であった者が文民に近い立場（学政）の職に任命されて、学生に「後生可畏焉」と出題したところ、皆なに笑われた。この宦官に「何故笑うか」と聞かれた教官が、恭しく「学生達があまりにも難しい問題なで一字減らしてもらえると有り難いと申しております」と言うのと、宦官笑って「それなら『後』の字を減て『生可畏焉』としよう」ある人が疑って、この笑話を何故「古艷部」に入れたのかと聞くので、余は「從來富貴のもので宦官にゴマをすらない人が何人いた」と答えた。

見えてくるのはやはり「礼教」批判ではあるまいか。年長者、目上の人間、特に親は一番偉く、逆らうことは許されないという事が「礼教」の基本であるが、現実にはその者達が尊敬に値しない人間である以上、「礼教」の教えは成立しないし、物事を一方的に決めつける教えそのものが肯定できないという批判ではないだろうか。当時の中国の腐敗しきった社会を考えると、光がまったく見えない。何故なら、上の人間が役職を金で買い、下の者に強要して遣った金を取り戻そうとする。そうされた下の者は勉強もせずに同じように金だけのために生きようとする。武人は腕を磨こうともせず、威張り散らす。庶民は出来れば楽をして、智を求めることもなく、その地位だけに着いて生きていきたいと願う。この様に目上の人間の言うことを信じて生きていけば正しく生きていると教える「礼教」は馮夢龍から見れば悪の教え以外の何物でもなかったのではないだろうか。その事を庶民にも理解させる為に、冒頭に「古艶部」を持ってきたのではないかと思われる。

### おわりに

今回で「笑府」古艶部に書かれている笑話全三十四話について考察させて頂いたこととなる。「笑府」はこの後、卷二として腐流部となり、儒学者や秀才と呼ばれる人々の笑話を載せ、卷十三部閩語部まで続き、七百八話の笑話で完結するが、そのテーマは礼教批判と一貫しているものの各巻で多くの立場、職業の人々を登場させることにより書かれており、各巻ごとに考察していくことが解りやすいかと思われる。よって、今回は卷一古艶部全三十四話の考察をもって一区切りとしたい。今後発表の機会があれば卷二腐流部三十五話目より書かせていただけたらと思うものである。